

# 点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■147■

「うばい合えは足らぬわけ合えばあまる」。栃木県足利市出身の相田みつをさんの言葉だ。

国会の予算審議は大詰め。中東情勢の緊迫化でエネルギー資源の確保に注目が集まる。そんな時だからこそ、この言葉が胸に去来する。

公の資産や価値を公平に分配する。非常に大切で難しい作業だが、これを形にしたものが分水工だ。分水工とは、川の水や湧水を公平に分ける仕組み（構造物）だ。私が初めて分水工を目にしたのは、山梨県北杜市にあ

## 分け合う工夫

# 公平で争いがない社会に

された。仕組みはこうだ。まず、湧水を大きな正方形の「分水桧（みづい）」にためる。そして桧の中心付近に三角形の石柱を立てると、桧に入ってきた水が三角形の斜辺に当たり、左右と直進方向の三つに均等に分けられる。

水利で苦労した群馬県

組みなので、分け方が「機

にも、構造は異なるが、たくさんの分水工がある。赤城北面では、四つもの分水工が昭和村の豊かな農作地を潤している。また、南面には、老農

械的かつ均等」なので。分水工は、利用者の合意のもと、流量を可変にする。「仕組みの公平さ」が争いのない社会に役立つと教えてくれている。

資源分配でも、公正な議論が尽くされることを願う。

る「三分一湧水」。八ヶ岳の湧水を巡って、三つの村で争いが絶えなかったため、水を公平に分け合うため江戸時代に考案

・船津傳次平が関わった赤城大沼用水を幹線とする水路に二つの分水工がある。このように、同じ流域に分水工が複数ある

何かを分け合う時、均等でないことが公平なことがある。家族で焼きま

物語「でんでんむしのかなしみ」は、他者も悲しみを抱えていることに気が付いた主人公が、嘆くのをやめるといってお話だ。資源も喜びも悲しみも、分け合うことでより良い世の中になると思う。

ケースは珍しいそうだが、このほか、長野壱（高崎市、赤榛（あかばら）、浜川市など

に配分するだろう。均等ではないけれど、皆が合意していれば公平な

宮 将史（みや・まさふみ）

1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。

2000年日本銀行入行、政策委員会室国会渉外課長など



を経て24年7月から現職